



金城学院大学 人間科学部
芸術表現療法学科
江村 哲二 教授

- 名古屋工業大学大学院工学研究科修了
 - ヨーロッパ各地への遊学経験後、第9回プザンソン国際作曲コンクール優勝、第4回芥川作曲賞受賞、第2回ルトスワフスキ国際作曲コンクール優勝
 - 研究課題/現代作曲技法論、複雑系システム論
- ウェブサイト <http://www.tetsujiemura.com>



本物を見抜く力とイマジネーションを身に付けてほしいと思っています。

大学教授、作曲家、科学者など様々な顔を持つ江村先生。肩書きを並べてみると、気難しそうな印象を持ってしまいがちですが、実際にお会いした先生はとても気さくな方でした。そんな江村先生に、学生に対する思いや作曲についてお伺いしました。

音楽との出会いと作曲家への道のりは

ピアノは5歳頃から母に教わっていました。ピアノの練習よりも外で遊び回っているほうが好きでしたが…。その他には、家がカトリックの家庭だったこともあって、毎週日曜には教会に行っていました。聖歌隊にも入っていたので、パイプオルガンの響きを耳にしたり、歌ったりしていたのは、今になって考えてみれば良いことだったのかもしれない。聖歌や賛美歌というのは西洋音楽の基礎ですから。

また、自然が好きだったこともあって、小・中学時代は科学少年でした。特に星を見るのが好きで、自分で作った望遠鏡でよく星を眺めていました。今でもサイエンスの分野には足を踏み入れている、今はニュー

ロン(脳神経)の数学モデルに関する研究で、論文を学会に発表しています。

大学も工学部に進んだので、日本ではほとんど音楽教育を受けていません。20才の頃にヨーロッパへ音楽の勉強をしに行こうと思い立ち、音楽大学や芸術大学に自分の作品を持ち込んで、いろんな先生に見てもらっていました。

そんななか、92年にポーランドのワルシャワで行われた「ルトスワフスキ国際作曲コンクール」に応募して、優勝したのです。どうして私みたいな無名の東洋人にこんな賞を授けてくれるのか不思議で、ルトスワフスキに質問したのです。そうしたら「評価すべきは作品のみにあり」と言ってくださり、感激しました。94年には「芥川作曲賞」をいただき



上 / ヴァイオリン協奏曲第2番「インテクステリア」で、先生の尊敬する武満徹の推挙を受け受賞した、94年の芥川作曲賞受賞の式典にて
中 / ルトスワフスキ国際作曲コンクール優勝の際、披露コンサートへの招待を受け向かった、ポーランド・ワルシャワにてルトスワフスキと
下 / プザンソン国際作曲コンクールで優勝した年の翌年、先生の優勝作品が課題曲となった指揮者コンクール決勝ラウンドでの様子を伝える地元の新聞記事



研究室には、メロノームや譜面、レコードなど、音楽家らしいものが入る。なかでも一際目立つのは、デスクの横に配置されたピアノ

ました。日本で私の作品が演奏されるようになったのはそれからです。98年にも「ブザンソン国際作曲コンクール」で優勝したのですが、このコンクールは、指揮者コンクールと作曲コンクールが隔年で行われていて、作曲コンクールで優勝すると、その作品が翌年の指揮者コンクールの決勝の課題曲になるんですよ。私の時は、スペイン・オランダ・フランスの方たちだったんですが、やはり3人3様でそれぞれ印象が違います。自分の作った曲が課題曲になるというのはおもしろいですね。

どうやって作曲しているのですか

作曲は、急に「さあ書きましょう」では書きません。頭の中に絶えず曲の萌芽みたいなものがあるのです。それはとても形にはならない、音にもならない、モヤッとしたイメージで、だいたい1年くらいかかって形になってくる。そして次の1年くらいで実際に音にしていくんです。イメージから実際に具現化させていくプロセスが、私にとっては夢の中にあるような感じで、一番楽しい時ですね。

作曲を教えるのに大変な点は

作曲には論理とイマジネーション(想像力)が大切だと考えています。

論理は、いわゆる作曲の技術。例えば、和声法や対位法などの音楽理論は勉強できるし、教えることもできます。しかし、イマジネーションをも含む作曲そのものを教えるのは非常に難しい。それがもどかしいところであり、学生一人ひとり伸ばしてあげたい部分でもありますね。私自身の経験で良かったと感じているのは、ヨーロッパ

に行くと、いわゆる本物に、一流のものに触れ、たくさんの曲を聴いたことです。何がいい音で何が悪い音なのか、何が本物で何が偽物なのかを、自分自身で体験していく中で、自分の耳も磨かれていく。それが一番大切なことだと思います。

先生の趣味を教えてください

趣味はスキーです。父親がスキーが好きで、小学生の頃から始めまし

た。印象に残っているのは修行時代に行ったスイスのプライトホルン。途中まではケーブルカーで行き、その後は半日かけてスキー板を担いで頂上まで登ったんです。帰りは標高差2600mの氷河を滑り下りました。自然に触れるのが好きなんです。同じ雪は二度とないし、気温や湿度も違います。同じスキー場でも行く日や時間によって変わりますからね。

テントの中にひとりしていると雪の降る音や風の音が聞こえてくるんです。そこから新しい発想が浮かぶことが多くて、実はその中から曲を書いたことも結構あるんです。都会にいる時にはなかなか機会がない、「耳を澄ます」ということで、イマジネーションが刺激されるんでしょうね。



修行時代に行ったという、標高4164mのプライトホルンの頂上にて。先生の思い出の写真

江村先生はこんな人



江村ゼミ4年生のみなさん

ゼミでは毎回私たちが疑問に思ったことをぶつけ、それに対して先生が答えられます。時には本を見せてもらったりレコードを聴かせてもらったりもします。西洋音楽だけではなく民族音楽や日本の音楽などについても詳しく、「音楽と美術は影響し合うものだから一緒」と、絵画や伝統芸能などについても本当に

博学で驚きます。作曲の仕方は教えることは出来ないと言いながら、先生が大切だと言っている「見る」こと「聴く」ことなど、たくさんの方があることを教えてください。時には悩み相談もするのですが、私たちに合わせてくれながら、とても親身になって相談に乗ってくださいます。